

死体蠟燭

(昭和2年発表)

小酒井不木

宵から勢いを増した風は、海獣が飢えて吠えるような音をたてて、庫裡、本堂の棟をかすめ、大地を崩さんばかりの雨は、時々砂つぶてを投げつけるように戸を叩いた。縁板という縁板、柱という柱が、すすり泣くような声を発して、家屋は宙に浮かんでいるかと思われるほど揺れた。

夏から秋へかけての嵐の特徴として、屋内の空気は息詰まるように蒸し暑かった。その蒸し暑さは一層、人の神経をいらだたせて、嵐の物凄さを拡大した。だから、ことし十五になる小坊主の法信が、天井から落ちてくる煤に胆を冷やして、部屋の隅に縮こまっているのも無理はなかった。

「法信！」

隣の部屋から呼んだ和尚の声に、ぴりツと身体を震わせて、あたかも、恐ろしい夢から覚めたかのように、彼はその眼をすえた。そしてしばらくの間、返答することはできなかった。

「法信！」

一層大きな和尚の声が呼んだ。

「は、はい」

「お前、御苦労だが、いつもの通り、本堂の方を見廻って来てくれないか」

言われて彼はぎくりとして身をすくめた。常ならば気楽な二人住まいが、こうした時にはうらめしかった。この恐ろしい嵐の時に、どうして一人きり、戸締まりを見に出かけられないよう。

「あの、和尚様」

と、彼はやつとのことと、声をしぼり出した。

「なんだ」

「今夜だけは……」

「ははは」

と、和尚の高笑いが聞こえた。

「恐ろしいというのか。よし、それでは、わしもいっしょに行くから、ついて来い」

法信は引きずられるようにして和尚の部屋に入った。

いつの間に用意したのか、本を読んでいた和尚は、手燭の蠟燭に火を点けて、先に立って本堂の方へ歩いて行った。五十を越したであろう年輩の、蠟燭の淡い明かりによって下方から照らし出された痩せ顔は、どくろを思わせるように気味が悪かった。

本堂に入ると、明かりはなびくように揺れて、二人の影は、天井にまで躍り上がった。空

気はどんよりと濁って、あたかも、果てしのない洞穴の中へでも踏みこんだように感じられ、法信は二度と再び、無事では帰れないのではないかという危惧の念さえ起こすのであった。正面に安座まします人間大の黒い阿弥陀如来の像は、和尚の差し出した蠟燭の明かりに、一層いかめしく照らし出された。和尚が念仏を唱えて、しばらくその前に立ち止まると、金色の仏具は、思い思いに揺れる火影を反射した。香炉、燈明皿、燭台、花瓶、木刻金色の蓮華をはじめ、須弥壇、経机、賽銭箱などの金具が、名の知れぬ昆虫のように輝いて、その数々の仏具の間に、何かしら恐ろしい怪物、たとえば巨大なコウモリが、べったり羽を広げて隠れているかのように思われ、法信の股の筋肉は、ひとりでに震えはじめた。

和尚は再び歩き出したが、さすがの和尚にも、その不気味さは伝わったらしく、前よりも速めに進んで、ひと通り戸締まりを見廻ると、蒼白い顔をしてほッとしたかのように溜息をついた。

しかし、和尚は、何を思ったか再び恐ろしい本堂に引きかえした。そして、阿弥陀如来の前に来たかと思うと、真下にあたる勤行の座につき、手燭をかたわらに置いて言った。

「法信、礼拝だ」

法信はからくり人形のようにその場にひれ伏した。しばらく和尚とともに念仏をとなえて、やがて顔をあげると、如来の慈悲忍辱の光顔は、一層柔和の色を増し、嵐にも動じない崇高さが、かえって法信を夢のような恐怖の世界に引き入れた。

「恐ろしい風だなあ」

和尚の言葉に法信はどきりとした。

「時に法信！」

しばらくの後、和尚は突然あらたまった口調で、法信の方に向き直って言った。

「今夜わしは、阿弥陀様の前で、お前に懺悔をしなければならぬことがある。わしは今、世にも恐ろしいわしの罪をお前に白状しようと思う。幸いこの嵐では、誰に聞かれる憂いもない。耳をさらえてよく聞いてくれよ」

和尚はその眼をぎろりと輝かして一段声を高めた。

「実はなあ、お前はわしを徳の高い坊主だと思っているかもしれないが、わしは阿弥陀様の前では、じつとして坐っておれぬくらいの、破戒無慚の、犬畜生にも劣る悪人だよ」

「えッ？」

あまりに意外な言葉に法信は思わず叫んで、石化したかのように全身の筋肉をこわばらせ、和尚の顔を穴があくほどながめた。

「わしはなあ、人を殺した大悪人だ。さあ、驚くのも無理はないが、お前がこの寺に来る前に雇ってあった良順という小坊主は、あれはわしが殺したのだ」

「嘘です、嘘です、和尚さま、それは嘘です。どうぞ、そんな恐ろしいことはもう言わないでください」

「いや、本当だよ。阿弥陀様の前で嘘は言わぬ。良順は、表向きは病気で死んだことになっているが、その実、わしが手をかけて死なせたのだ。それには訳があるのだよ、深い事情

があるのだよ。その事情というのはまことに恥ずかしいことだけれども、これだけはどうしてもお前に聞いてもらわねばならん。

わしは坊主となって四十年、その間、ずいぶん人間の焼ける匂いを嗅いだ。初めはあまり心地のよいものではなかったが、だんだん年をとるにしたがって、あの匂いがたまらなく好きになったのだ。そしてしまいは、人間の脂肪の焼ける匂いを一日でも嗅がぬ日があると、なんだかこう胸の中を搔きむしりたくなるような、いらいらした気持ちになって、じっとして坐っていることすらできなくなったのだ。浅ましいことだと思っても、どうにも致し方がない。魚を焼いても、牛肉を焼いても、その匂いは決してわしを満足させてくれぬ。あの、したまがりの花（※彼岸花）の毒々しい色を思わせるような人肉の焼ける匂いは、とても、ほかの匂いでは真似ができぬ。

お前は、わしがこのあいだ貸してやった雨月物語の青頭巾の話を覚えているだろう。童児に恋をした坊主が、童児に死なれて悲しさのあまり、その肉を食い尽くし、それからそれに味をしめて、後には里の人々を殺しに出たというあの話を。わしは、ちようど、あの通りに人界の鬼となったのだ。そして、とうとう、そのために、良順を殺すようなことになったのだ。

良順がしばらく病気をしたのを幸いに、わしはひそかに毒を与えて、首尾よく彼を殺してしまった。まさか、わしが殺したとは誰も思わないから、ちっとも疑われずに葬式を出した。しかし、彼が焼かれる前に、彼の肉は、ことごとく、わしのために切りとられたのだ。そしてそのことは、もとより誰も知るはずがなかったのだ。

それから、わしがその良順の肉をどうしたと思う。さすがにわしもたびたび人を殺すのは厭だから、なるべく長い間、彼の肉の焼ける匂いを嗅ぎたいと思ったのだよ。そこでいろいろと考えた結果、ふと妙案を思いついたのだ。それはほかでもない、その肉の脂肪から、蠟燭を作ろうと考えたのだ。蠟燭ならば坊主の身として、朝晩それを仏前で燃やして匂いを感じ、誰に怪しまれることもない。それに蠟燭にしておけば、かなり長い間楽しむことができる。こう思っ、わしはひそかに手ずから蠟燭を作ったよ。普通の蠟の中へ良順の脂肪を溶かしこんで、わしは沢山思いどおりのものを作った。

そして毎日、わしはもったいなくも、勤行の際に、その蠟燭を燃やして、わしの犬畜生にも劣る欲を満足させておった。時には勤行以外のおりにも、蠟燭を燃やして楽しんだことがある。だが今日まで、仏罰にも当たらず暮らしてきた。思えば恐ろしいことだった。

ところが、法信、わしの作った蠟燭には限りがある。毎日一本ずつ燃やしても一年かかれれば三百六十五本なくなる。だんだん蠟燭がなくなってゆくにつれて、わしは言うに言えぬもどかしさを覚えたよ。この二、三日、わしはなんともいえぬやるせない心細さを感じてきた。これはなんとかしなければならんと、法信、わしは食べ物も喉を通らぬくらい考え悩んだのだ。

ここにいま燃えているのが、良順の脂肪で作った蠟燭のおしまいだ。わしはさつきから気が気でないのだ。法信、わしは良順の代わりが欲しくなった。わしは、法信、お前を殺した

くなった。

こら、何をする！ 逃げようたつてもう駄目だ。この嵐は、人を殺すにちょうどいい。これ泣くな、泣いたとて、わめいたとて、誰にも聞こえやせん。お前はもう、蛇に見込まれた蛙も同然だ。いさぎよく覚悟してくれ、な、わしの心を満足させてくれ、これ、どうかわしの不思議な心を楽しませる蟬燭となってくれ。」

和尚に腕をつかまれた法信は、絶大な恐怖のために、もはや泣き声を立てることすらできず、その場に水飴のようにうずくまってしまった。でも、今が生死のわかれ目と思うと、その心は最後の頼みの綱を求めて、思わず嘆願の言葉となった。

「和尚さま、どうぞ勘弁してくださいませ。わたしは死にたくありません、どうぞどうぞ、命をお助けくださいませ」

「ふ、ふ、ふ」

和尚は悪魔の笑いを浮かべた。その時、嵐は一層強く本堂を揺すぶった。

「これ、この期に及んで、お前がいくら、なんといつても、わしはもう容赦しない。さあ、覚悟をせい！」

こう言ったかと思うと、和尚は腰のあたりに手をやって、ぴかりとするものを取り出した。「わッ、和尚さま、後生です、どうかその刃物だけは、どうか、御免なされてくださいませ！ わたしは厭です、殺されては困ります」

この言葉を聞くなり、和尚は振り上げた腕をそのまま、静かに下ろした。

「お前はそれほど命が惜しいのか」

「はい」

法信は手を合わせて和尚を拝んだ。

「それでは、お前の命は助けてやろう。その代わり、わしの言うことをなんでも聞くか」

「はい、どんなことでもします」

「きつとだな？」

「はい」

「それならわしの人殺しを手伝ってくれるか」

「え？」

「お前を助ければ、その代わりの人を殺さにならん。その手伝いをお前はするか」

「そ、そんな恐ろしいこと」

「できぬというのか」

「でも」

「それならば、いさぎよく殺されるか」

「ああ、和尚さま」

「どうだ」

「ど、どんなことでも致します」

「手伝ってくれるか」

「は、はい」

「よし、それではこれからすぐに取りかかる」

「え？」

「これから人殺しをするのだ」

「どこで……」

「どこで」

「誰を殺すのですか」

和尚は返答する代わりに、殺気に満ちた顔をして、左手で、阿弥陀如来の方を指した。

「それではあの阿弥陀様を？」

「そうではない。あの尊像の後ろには、今、この嵐に乗じて、寺に忍び入った賽銭泥棒が隠れている。それをお前の身代わりにするのだ。さあ来い」

和尚は立ち上がった。が、法信が立ち上がらぬ前に、そこに異様な光景があらわれた。

阿弥陀如来の後ろから、巨大な鼠のような真っ黒な怪物が、さッと飛び出して、あたりのものを蹴散らかし、一目散に逃げ出して行った。法信が、それを覆面の泥棒だと知るには幾秒かの時間を要した。

「やッ、和尚さま！」

不思議にもその時恐怖を忘れた彼が、こう叫んで、泥棒のあとから駆け出そうとすると、和尚はぎゅッと彼の腕をつかみ今までは似ても似つかぬやさしい顔をして言った。

「捨てておけ。逃げたものは逃がしておけ。だが、法信、勘忍してくれよ。今わしの話した蠟燭の一件は、あれはわしがとっさの間にこしらえた話だよ。さっき、わしは阿弥陀様の後ろに、ちらツと動くものを見たので、さては、泥棒がこの嵐に乗じて賽銭を盗みに来たのだと知ったが、うっかりわめいては、泥棒がどんなことをするかも知れぬと思ったから、これは策略で追い散らすより外はないと考えたのだよ。刀でも振りまわされた日にゃ、二人とも殺されてしまうかもしれないからなあ。でも、幸いに、泥棒もわしの話を本当だと思って逃げて行った。なに、この蠟燭は普通のものだよ。良順は病気で死んだに間違いない。実は今夜わしは雨月物語を読んでいたのだ。それから思いついたのだ、お前をびっくりさせたあの話を」

こう言って右手に持った光るものを差し出し、さらに続けた。

「お前が刃物だと言ったのは、この扇子だよ。恐ろしい時には、物が間違つて見える。きつとあの泥棒もこれを刃物だと思ったにちがいない……」

嵐は、依然として狂い猛っていた。